

中上 亜紀 秋月 裕則 加島 健司

徳島赤十字病院 耳鼻咽喉科

要 旨

当院では時間外救急診療で一次救急から入院や専門的な処置が必要な二次、三次救急までの耳鼻咽喉科患者の受け入れを行っている。徳島赤十字病院における耳鼻咽喉科関連疾患の救急外来の現状を明らかにするため、夜間・休日に当院の救急外来を受診した耳鼻咽喉科疾患患者についての統計をとり検討を行った。

対象は平成17年9月から平成18年8月までの12ヶ月間に徳島赤十字病院の時間外救急外来を受診した患者である。対象患者は692名（57.6名/月）、内訳は男性343名、女性349名、年齢は0歳から94歳である。入院加療を要した患者は82名（6.9名/月）で全体の11.9%を占め、原因疾患はめまいが一番多く41.5%を占めていた。

キーワード：耳鼻咽喉科，救急外来，統計

はじめに

核家族化，共稼ぎ世帯の増加，深夜帯での活動者の増加といった社会の変化から近年ますます時間外救急外来診療（以後は時間外救急）に対する社会的関心や要望が高まっている。耳鼻咽喉科疾患はその部位・疾患の特殊性から専門的な治療を必要とすることが多く，時間外救急でも重要な役割を果たしていると考えられる。そこで徳島赤十字病院における耳鼻咽喉科時間外救急の現状と耳鼻咽喉科医に求められる役割を明らかにする目的で平成17年9月から平成18年8月末までの一年間に徳島赤十字病院の時間外救急を受診した耳鼻咽喉科患者の調査を行った。

徳島赤十字病院の立地と時間外救急の体制について述べる。徳島県の人口は約80万人であり，県庁所在地である徳島市は人口約27万人である。当院は徳島市に隣接する人口4万2千人の小松島市にあり，徳島市の中心地から車で約30分の立地である。救急当直医師1名と外科系医師1名，内科系医師1名，小児科医師1名と研修医数名の総勢6～7名の当直体制で各診療科の一次救急から二次，三次救急疾患の診療に当たっている。まず当直医が初期治療を開始し，専門治療が必要な場合は自宅待機をしている各専門診療科医師に緊急連絡を行って治療を行う体制をとっている。ただし，小児科では平成14年から小児救急医療拠点病院と

して小児科医が完全二交代制をとり24時間体制で夜間も常駐し救急業務を担っている。当院の時間外救急の勤務時間は平日の17時から翌朝の8時30分まで，休日は朝9時から17時までの日勤帯と，17時から翌朝9時までの夜勤帯で交代し勤務を行っている。当院の当直医師は専門診療科を含めてインターネットのホームページ上に公開している。当院の耳鼻咽喉科医は3名で外科系医師として1人あたり月2～3回の当直を行っており調査期間中に計78回の当直業務を行った。

対 象

対象期間は平成17年9月から平成18年8月末までの12ヶ月間で当院の時間外救急において耳鼻咽喉科を受診した患者は777名であった。このうち救急疾患を取り扱う時間外救急外来の業務を明らかにする為，平日については市中病院や開業医が業務を終える19時以降土日祝祭日については終日の来院患者について詳細に調査したところ，耳鼻咽喉科疾患の確定診断がついた患者は692名（男性343名，女性349名）であり，疾患別に分類を行った。年齢は0歳から93歳である。

結 果

1) 性別, 年齢分布

男性は343名, 女性は349名とほぼ同数であった. 年齢分布では10歳ごとに年代分けしたところ10歳未満の患者が26.6%を占め最多であった(図1).

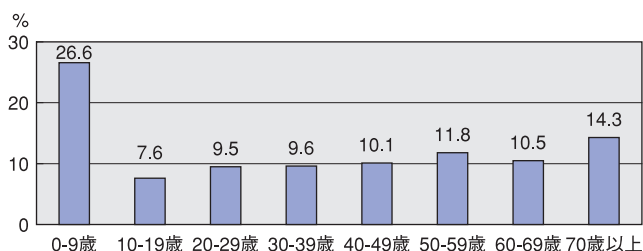


図1 受診患者の年齢分布

次に小児(0~14歳), 青年(15~29歳), 壮年(30~49歳), 中年(50~69歳), 高年(70歳以上)に分けたところ, 小児科を受診する年齢層である14歳以下の小児患者の割合は31.5%であった. しかし調査期間中の耳鼻咽喉科医が当直を行った日(計78日間)のみを調べたところ, 小児患者は43.0%を占め年平均の31.5%に比べ割合が高かった. 他の年齢層では年平均と当番日の間に明らかな割合の変化はなかった(図2).

2) 時間外救急患者の入院比率

時間外救急患者のうち緊急入院を要したものは男性

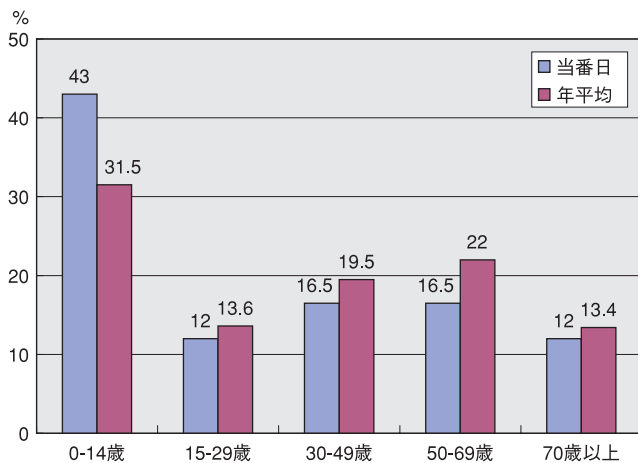


図2 受診患者の割合(当直日と年平均の比較)

44名, 女性38名で計82名. 入院患者比率は11.8%であった. 時間外緊急入院患者の耳鼻咽喉科年間入院患者全体に占める割合は16.4%であった. 入院を要した患者のうち救急車で来院した患者は18名で22.0%であり, 疾患はめまいが12名, 次いで鼻出血であった.

3) 疾患別分類

外来患者では急性中耳炎が最多で29.0%(201名), 次に扁桃炎や扁桃周囲膿瘍などを含む急性上気道炎, そしてめまい, 鼻出血, 異物が続いて多かった(図3). 緊急入院患者ではめまいが最多で41.5%を占め, ついで顔面神経麻痺, 鼻出血が多かった(図4).

4) 小児科時間外救急外来を受診した耳鼻咽喉科疾患患者の調査

調査期間中に小児科を受診した患者は17,930名で

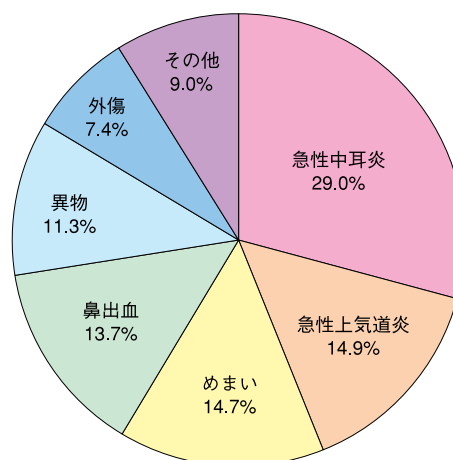


図3 疾患別受診者の割合

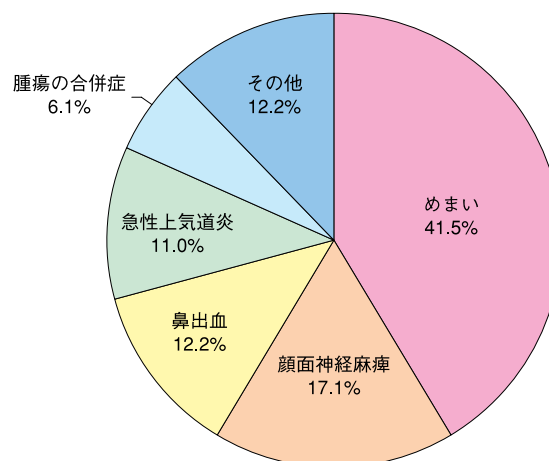


図4 入院患者の疾患別割合

あった。このうち急性上気道炎をのぞく耳鼻咽喉科疾患は中耳炎278名、鼻出血5名、異物2名、他3名であった。

5) 入院を要しためまい疾患

原因不明のめまいであるめまい症を除けば、メニエール病、めまいを伴う突発性難聴、良性発作性頭位めまい症が多かった。(図5)。

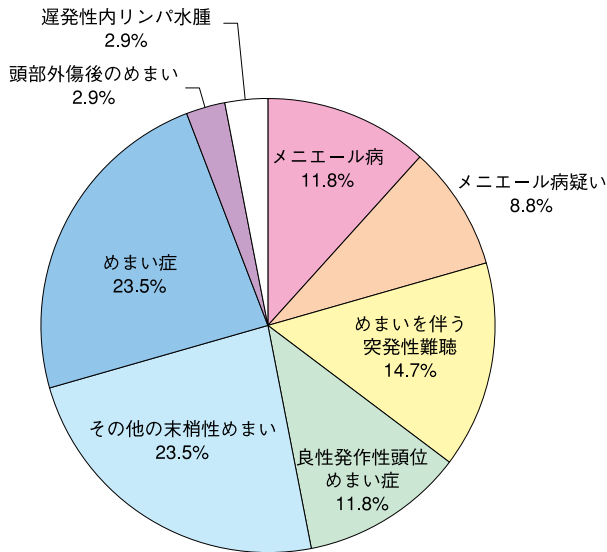


図5 入院を要しためまいの診断

6) 受診する時間帯

救急外来を受診する時間帯別に分けたところ平日は20時、休日は9時と20時の二峰性に受診者が多かった。深夜帯の受診も少数の患者が継続して受診していた(図6)。

7) 月別患者数

11月から3月の冬期に受診者数が増える傾向が見られた。また、5月に受診者が多かった(図7)。

考 察

1) 年齢分布に関しては他の報告と同様に10歳未満が26.6%と最も多く、疾患別構成で中耳炎の頻度が高いことを反映していると思われる。しかし他の報告では10歳未満の占める割合は檜葉らの41.7%¹⁾、田原らの50.2%²⁾、鈴木らの30-35%³⁾とさらに高い傾向があった。また、耳鼻咽喉科医の当直日には耳鼻咽喉科疾患の患者が時間外救急全体

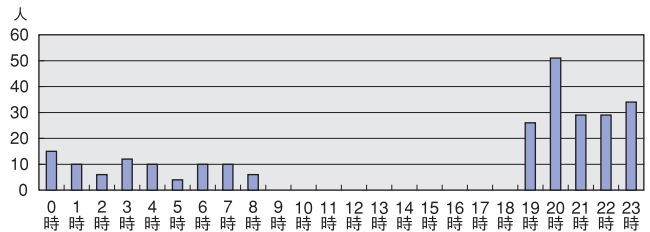


図6-1 時間帯別受診状況(平日)

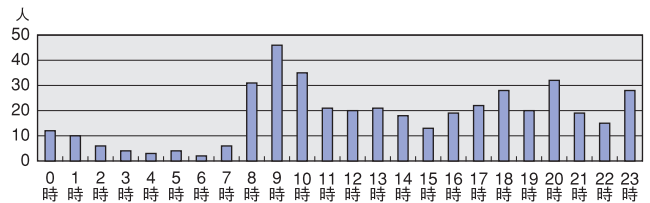


図6-2 時間帯別受診状況(休日)

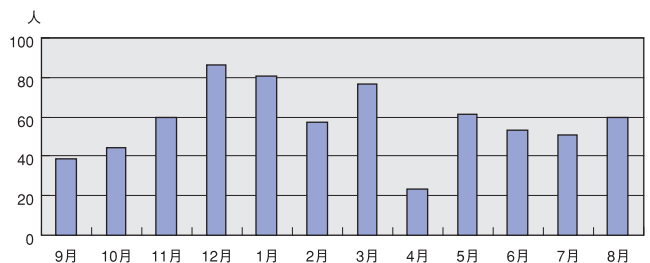


図7 月別救急受診者数

の受診患者数の4.2%を占め年平均の2.4%と比べ高く、そのうち小児の割合は当番日が43.0%と年平均の31.5%と比べて多い。しかし、他の年齢層では明らかな差は見られなかった。つまり耳鼻咽喉科医の当直日には小児の受診者数増加が耳鼻咽喉科受診者数を押し上げていることになる。この理由として、当院では小児科医が常駐している為に耳鼻咽喉科疾患の小児患者は小児科を受診していることが推測される。そこで当院小児科の時間外救急受診者を調べたところ、調査期間中に中耳炎が278名受診しており、その他に鼻出血や鼻内異物などの耳鼻咽喉科疾患の患者16名を認め、多数の小児耳鼻咽喉科疾患患者が小児科を受診していた。また、当直医を専門分野も含めてインターネットの病院ホームページ上で開示していることや、救急医療情報を消防署へ問い合わせると専門医が当直をしている病院を教えてくれるシステム

があることから耳鼻咽喉科医の当直日には小児の耳鼻咽喉科疾患の受診件数が増えていることが推測された。

- 2) 緊急入院患者の割合は外来受診者数の11.9%を占めていた。三次救急を担う大学病院の報告では入院の割合が多く10.0%以上の報告が見られた²⁾が、市中病院では数%である¹⁾ことに比べ本院の緊急入院の割合は多かった。耳鼻咽喉科入院患者全体に占める緊急入院患者の割合は16.4%を占めた。
- 3) 外来受診者の疾患別分類では中耳炎が29.0%と最多を占めた。次いで急性上気道炎や異物、鼻出血が多くを占めるのは他の報告と同様であるが、当院ではめまいや顔面神経麻痺の患者も多数みられた。脳梗塞などの緊急を要する脳血管障害を疑われて時間外救急外来を受診する顔面神経麻痺やめまい患者が多いことも一因として考えられた。めまいは各施設によって主に診療している科が様々であることから救急外来の報告におけるめまい患者の割合も施設により差が生じる。当院では14.7%を占めていた。めまい患者の割合は樫葉ら¹⁾の11.2%、稲垣ら⁴⁾の6.5%、阿部ら⁵⁾の6.0%という報告は比較的割合が高く、その他の施設の報告が4.0%未満であり^{6), 7)}、当院のめまい患者の割合は高かった。当院ではめまい患者は耳鼻咽喉科を受診することが周知されており、めまい患者の受診が多く、割合が高くなったと考えられる。そして眼振や蝸牛症状以外の明らかな神経学的異常所見を認めず末梢性めまいと考えられる患者のうち入院加療が必要になった場合は主に耳鼻咽喉科で入院加療をするという経路が確立しており、当科入院患者の41.5%をめまい患者が占める結果となったと考えられる。緊急入院患者の割合が11.3%と高いのも救急外来を受診するめまい患者の33.3%が入院していることが原因と推測された。
- 4) 外来受診者の疾患別分類では中耳炎が29.0%と最多を占めたが他の報告に比べ低かった。しかし、耳鼻咽喉科の時間外救急受診者に小児科を受診した耳鼻咽喉科疾患受診者を加えたと中耳炎が48.6%を占め中耳炎患者が耳鼻科救急外来の約半数を占めるという他の報告とほぼ一致した。
- 5) 時間外救急を受診する時間帯が20時ごろに多いのは日中の仕事を終えて来院する患者が多く、午後

6時から7時ごろまでは開業医での診察が行われているが、この時間に間に合わなかった患者が救急外来を受診するためと思われた。休日の午前は夜間に発症した疾患で患者受診数が増えると考えられた。

- 6) 冬期に中耳炎や急性上気道炎などが増えることから受診者数が増加していた。また、1月や5月といった連休がある月に救急受診数が増加していた。

まとめ

徳島赤十字病院での救急外来の現況を報告した。年齢分布では10歳未満が多く、中耳炎が最多であったが、耳鼻咽喉科医の当直日以外の日には多数の小児中耳炎患者が小児科を受診していた。受診者の11.3%が入院を要し、めまいが42.0%を占め最多であった。耳鼻咽喉科という部位の特殊性から、救急医療における耳鼻咽喉科の役割は重要と思われる。

文 献

- 1) 樫葉恵子, 瀬尾 徹, 坂 直紀: 宝塚市立病院における耳鼻咽喉科救急外来の現況. 耳鼻臨床 99: 823-828, 2006
- 2) 田原哲也, 関谷 透, 沖中芳彦, 他: 山口大学耳鼻咽喉科救急診療の実態. 耳鼻臨床 84: 533-540, 1991
- 3) 鈴木滋生, 岡 亮, 松永 喬, 他: 過去20年間における当科時間外救急患者の動態. 耳鼻臨床補 37: 346-350, 1990
- 4) 稲垣太郎, 河野 淳, 小川恭生, 他: 耳鼻咽喉科救急外来受診状況. 耳鼻臨床 98: 505-514, 2005
- 5) 阿部治彦, 井上都子: 都立広尾病院・耳鼻咽喉科の救急外来における最近2年間の集計-14年前との比較-. 耳喉頭頸 71: 787-791, 1999
- 6) 小関芳宏, 大内利昭, 井上良江, 他: 耳鼻咽喉科救急外来患者の検討. 耳展 31(補4): 429-435, 1988
- 7) 中原 啓, 竹内裕美, 竹内裕一, 他: 当科における休日受診患者の動態. 耳鼻 46(補3): S180-S185, 2000

Patients with Otorhinolaryngological Disease Visiting the Emergency Room of Tokushima Red Cross Hospital

Aki NAKAUE, Hironori AKIZUKI, Kenji KASHIMA

Division of Otorhinolaryngology, Tokushima Red Cross Hospital

Our hospital accepts three categories of emergency cases with otorhinolaryngological problems, i.e., cases requiring primary emergency care as well as cases requiring secondary and tertiary emergency care (cases requiring hospitalization and highly specialized care). To investigate the current status of emergency care provided at Tokushima Red Cross Hospital for patients with otorhinolaryngological disease, the present study analyzed the statistics of patients with otorhinolaryngological disease who visited our emergency room at night or on holidays.

The subjects of this study were patients who visited the emergency room of Tokushima Red Cross Hospital during the 12-month period from September 2005 to August 2006. A total of 692 (57.6/month) patients with otorhinolaryngological disease consulted the emergency room. There were 343 males and 349 females, with ages ranging from 0 to 94 years. Hospitalization was required for 82 patients (6.9 patients/month), accounting for 11.9% of all visitors. The most frequent condition requiring hospitalization was vertigo (41.5%).

Key words: emergency clinic, otorhinolaryngological disease, statistical review

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 12:40-44, 2007
